「わたしのにほんご」は学習者の中にある

1. はじめに

本レポートでは、実践研究（５）「「状況」のなかで言語とコミュニケーションを考える日本語教育実践」における 3 つの目標について、どこまで達成できたかを述べる。3 つの目標は、次のとおりである。

（１）「文型」や「表現（機能）」から出発するのではなく,「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を理解し，実現する。
（２）1 人ひとりの学習者にとって「＋１」になる活動を組み立て,実践する。
（３）学期開始時に,各自で「私の目標」を立てる。

（10 月 7 日講義スライド）

（３）の「私の目標」について、筆者は学期開始時に次の目標を立てた。

目標１：自身の日本語教育観を問い直す。
目標２：担当回である「SNS に写真をアップする」の授業を通じて、SNS に日本語で投稿したい学習者が、実際に日本語で投稿できるようになる。

（Moodle「「私の目標」を書き込む掲示板です」）

以下、それぞれの目標の達成度について、本授業を通して学んだり考えたりしたことを交えて述べる。

2. 「「文型」や「表現（機能）」から出発するのではなく，「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を理解し，実現する。」

本章では、本授業の目標の 1 つ目である、「「文型」や「表現（機能）」から出発するのではなく,「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を理解し，実現する。」について述べる。「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践について、現時点で理解はできたと感じている。一方で、その実現は、あまりできておらず、数字で表すと 3 割ほどの達成度だと感じている。

まず、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践をどのように理解したかについて述べる。筆者が一番印象に残っているのは、本科目の実践授業である「わたしのにほんご」プロジェクト１−２」（以下、「わたにほ」と記す）のLesson7「説明する」でのグループワークだ。グループワークでは、好きな〇〇について説明するという活動を行なった。筆者のグループは、学習者 A、B と筆者を含めたたまご先生 2 名だった。この時の出来事について、筆者は振り返りに次のように書いている。

> 学習者 A は焼肉が好きだと言い、特に日本の牛肉が好きだと説明してくれたので、「和牛」という言葉を教えると、その後も「和牛」という言葉を使ってたくさん説明してくれた。学習者 B は一蘭のラーメンが好きだと教えてくれた。ラーメンのお皿の名前が丼だと知ると、とても嬉しそうで、そのあと小林先生が教えられた親子丼にも興味津々だった。さらに、学習者 B から魚の丼はないのかという質問が出て、「海鮮丼」についても教えた。一方で、SNS の話が出た際に、「流行っている」「バズっている」などの表現を教えたが、学習者の反応は薄く、その後これらの言葉を使うことはなかった。
>
> このようなグループワークを経て、学習者自身が自分の日本語、自分らしい日本語を話すためには、「和牛」や「丼」のように、学習者の質問や学習者の発言から

新しい表現や言葉を教えることが効果的だと感じた。「流行っている」「バズっている」という表現は、私が勝手に知りたいだろう、役に立つだろうと考えて教えてしまったが、学習者にとっては、今はその言葉を知りたいタイミングではなかったのかもしれない。これからは、「和牛」「丼」を教えた時のように、学習者の質問や発言から新しい言葉を教えたいと思う。

（Moodle「Lesson7__振り返り」）

振り返りにあるように、筆者は「流行っている」と「バズっている」は知っておいた方がいいだろうと考えて学習者に教えてしまった。しかし、これは表現から出発した言語教育であり、教師の押し付けになってしまっていた。「わたにほ」は、「「日本語で話したいこと／書きたいこと」を持ち寄り、「わたしのにほんご（文法と語彙）」をたくさん増やしていく授業」（シラバス「「わたしのにほんご」プロジェクト１－２　（留学生対象日本語科目）」授業概要）である。Lesson7 を通じて、学習者 A にとっては「和牛」が、学習者 B にとっては「丼」が、「わたしのにほんご」なのだと実感した。そして、その「わたしのにほんご」は決して教師が生み出せるものではなく、学習者の中にあるものであり、教師の役割はそれらを引き出すことや、日本語にすることの支援なのではないかと考えた。また、Lesson8 では復習を行ったが、その際に、Lesson7 で「和牛」を教えた学習者 A から、「「和牛」という言葉が聞こえてきた。」「授業中にその学習者はメモを取っていなかったが、やはり自分の知りたい、学びたい表現だったからか、覚えていたのだと思う。」（Moodle「Lesson8__振り返り」）

Lesson7 以降、教師である筆者が先回りして何かを教えようとするのではなく、学習者の状況に応じた「わたしのにほんご」を増やそうという思いで「わたにほ」に参加していた。しかしその過程で、筆者は、学習者の状況を理解するためには、学習者の発言をそのまま理解することが重要だと勘違いしてしまった。その勘違いに気付いたのは、12 月 23 日の授業である。Lesson11 からメールの授業が始まり、その後の 12 月 23 日の授業では、グループごとにメールの授業デザインについて話し合った。グループでは、Lesson11 で、自分は日本語でメールを書く必要はない、英語だけで生活できているという学習者がおり、メールの授業に意欲的でなかったという話が出た。その話を聞き、筆者は、その学習者にもいつか日本語でメールを書く必要が生じるのではないかと思ったが、それはあくまでも教師の考えであり、学習者の状況はそうではないのだと、学習者の発言をそのまま理解した。そして、筆者のグループでは、メールを書く状況がある人向けと、メールを書く状況がないと思っている人向けに分けて授業デザインを考えた。これに対し、小林先生から、「学習者の発言をそのまま信じるのではなく、その発言の意図、奥を考える。」というアドバイスをいただいた。このアドバイスにより、学習者の状況を把握するためには、学習者の発言をそのまま信じるしか方法がないという自分の考えは間違っていたと気付いた。そして、小林先生から、「学習者のニーズは学習者だけが知っているわけではなく、周りの人が知っている場合もある。」と教えていただいた。学習者の状況は学習者が持っているものだが、その状況が全て発言により表れるわけでないし、学習者自身も自分の状況がわかっていない場合もある。だからこそ、教師の役割は、学習者の発言をそのまま信じるのではなく、その発言の意図や周りの人から聞いたニーズまで考慮した上で学習者の状況をできるだけ把握し、「わたしのにほんご」を増やすための支援をすることなのだと学んだ。

以上のような学びを通じて、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を徐々に理解することができたと感じている。次に、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を実現できたかどうかについて述べる。前述したように、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践の実現ができたのは、3 割程度だと感じている。まず、実践できたのは、筆者が担当した Lesson9「SNS に写真をアップする」の授業で、Padlet を用いて、学習者が自分の写真を投稿する活動を行なったことだ。

Padlet とはオンライン掲示板アプリであり、それを SNS に見立てて、学習者がクラスで共有したい写真を日本語と共にアップするという活動を行なった。この活動に関して、筆者は次のように振り返っている。

> 学習者が自分の写真を使って実際に投稿するという活動ができたので、SNS という場において学習者が「わたしのにほんご」を使えたのではないかと思う。投稿について学習者に話しかけると、その写真について嬉しそうに日本語で話してくれたので、自分が実際に投稿したい写真を使うのは良かったのではないかと考える。
>
> (Moodle「Lesson9_振り返り」)

学習者が自分自身の写真を用いて投稿を行うことで、学習者の状況に落とし込んだ活動ができ、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を実現できたのではないかと考える。しかしながら、筆者が行なった Lesson9 のもう一つの活動であるワークシートでは、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践をあまり実現できなかったと反省している。ワークシートには、Instagram と Twitter で用いられる表現を、例文で英訳と共に提示し、学習者が同じ文章を打つ活動を行なった。この活動には、打つ練習と、SNS で使われる日本語のインプットという 2 つの狙いがあった。しかし、筆者が提示した例文は 18 種類であり、SNS で用いられる表現のごく一部だった。さらに、それらの表現を選んだのは筆者であるため、学習者の状況に寄り添えていなかったと思う。「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を実現するためには、学習者が自ら使いたい SNS の世界に入り、その中で学びたい表現をインプットするという活動をするとよかったのではないかと考えている。

本章の最後に、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を実現できなかった事例をもう一つ述べる。それは、Lesson12「メールを始める」にて、「夜分に失礼します。」という表現を学習者に教えた時のことである。筆者は、「夜分に失礼します。」の意味を教えた上で、メールを夜遅くに送ることは失礼だから、「夜分に失礼します」を使ってメールを送るのはやむを得ない場合だけにした方がいいと伝えた。しかし、1 月 13 日の授業で、筆者の教え方は、学習者それぞれの考え方を無視したものだったと気付いた。小林先生とたまご先生の中でも、夜分にメールを送ることに対して様々な意見があり、「夜分に失礼します。」という表現を使う人もいれば、そもそも夜分にはメールを送らないという人もいた。このように、どのように行動するかは人によって異なり、当然「わたにほ」の学習者の中でも、どのように振る舞いたいかは人それぞれだ。それにも関わらず、筆者は Lesson12 にて、学習者の考えやどう行動したいかについて聞かずに、筆者の考えに基づいた説明をしてしまった。「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を実現するためには、まず学習者が夜分にメールを送ることに関してどう考えているかや、どう行動したいかについてを聞き、それに応じた説明をすべきだったと考える。

3. 1 人ひとりの学習者にとって「＋１」になる活動を組み立て，実践する。

次に、目標の 2 つ目である、「1 人ひとりの学習者にとって「＋１」になる活動を組み立て，実践する。」について、どこまで達成できたかを述べる。この目標について、動的な文法能力という観点から述べると、ほとんど達成できておらず、筆者の今後における一番の課題だと考えている。11 月 11 日の授業にて、小林先生から「「目の前の学習者の頭の中で起きていることを知り（洞察力），自らが持っている文法知識，言語分析力を駆使し（瞬発力），相手に届くように伝えられる（説明力）」という動的な文法教育能力」（11 月 11 日講義スライド）がこれからの日本語教師に求められると学んだ。そして、この動的な文法教育能力こそが、1 人ひとりの学習者にとって「+１」になる活動に繋がると考えた。なぜなら、例えば複数の学習者から同じ質問を受けたとしても、学習者が躓いている部分は 1 人ひとり

異なる可能性があるし、それぞれの学習者にとって適切な説明は異なるからである。しかしながら、筆者はこの動的な文法教育能力に乏しく、学習者から受けた質問に答えられずに、小林先生やTAのXさんに助けてもらう場面があったため、1人ひとりの学習者にとって「＋１」になる活動を組み立て、実践することがほとんどできなかったと感じている。今後、動的な文法教育能力を身につけていくために特に意識して行いたいことは、学習者の頭の中を洞察することだ。そして、文法知識、言語分析力も身につけ、目の前の学習者に最適な説明ができるような教師を目指したい。

4.「私の目標」

4.1 自身の日本語教育観を問い直す。

最後に、目標の3つ目である「私の目標」について、どこまで達成できたかを述べる。1章で述べたように、筆者は「私の目標」を2つ設定した。まず、目標1の「自身の日本語教育観を問い直す。」について述べる。この目標を設定した理由は、次のとおりである。

> Lesson1の授業を経て、自身の日本語教育観がまだまだ固まっていないことに気付きました。例えば、授業中の媒介語使用に関して、良いことだと頭では考えていましたが、実際に授業で日本語よりも先に英語を使ったことを反省したため、自分の媒介語使用に対する考えが定まっていないことがわかりました。そこで、本授業を通じて、自身の日本語教育観を問い直し、再構築していきたいと思います。具体的には、小林先生が出してくださった論点や、たまご先生の行う授業の中で印象に残った点や疑問点、ディスカッションなどから、自分の意見や考えをまとめることで、日本語教育観を整理していき、授業終了時には、その時点での日本語教育観を言語化できるようにしたいと考えています。
>
> (Moodle「「私の目標」を書き込む掲示板です」)

このような理由から、「自身の日本語教育観を問い直す。」という目標を立てたのだが、「わたにほ」の授業実践、本授業の講義、そしてZOOMやMoodleでの話し合いの中で様々なことを考え、現時点での日本語教育観を構築することができたと思う。本章では、本授業で学んだり、考えたりしたことの中で、特に自分の日本語教育観が大きく問い直されたことを3つ述べる。

1つ目は、媒介語の使用についてである。この目標を立てたきっかけでもある媒介語の使用について、授業を経て、現時点では次のように考えている。まず、日本語教育において、媒介語を使用しても良いと考える。10月7日の授業で、小林先生が、「第二言語環境にいる「わたにほ」の受講生にとって、日本語しか使えない状況は理不尽な場合もある」とおっしゃっていたように、媒介語が使えないことで学習者の心理的負担を大きくしてしまう可能性がある。また、日本語ができるようになるという目的のためには、日本語で説明するよりも媒介語で説明した方が理解は早いかもしれない。このような理由から、教室で媒介語を使用することは良いことだと考えた。ただ、説明を全て媒介語に頼るというわけではない。教師が説明したり話したりする時間は、学習者が活動したり話したりする時間を奪うことに繋がる。このような理由から、説明を全て教師による説明や、媒介語使用に頼ってはいけないと学んだ。例えば、Lesson14の復習の授業で用いたワークシートには、そのワークシートを見ただけで学習者が何をするかわかるように工夫されていたので、教師の説明はほとんどいらなかった。このように、媒介語を使ってもよいが、日本語も媒介語も必要ない場合があるということを念頭に置いておきたいと思う。「わたにほ」では、英語を媒介語として使用できたが、教師と学習者の間に共通の言語がなく、媒介語が使用できない場合に、どのように活動をデザインするかが今後の課題だ。

日本語教育観が大きく問い直されたことの 2 つ目は、目的と方法を切り分けることだ。11 月 4 日の授業で、「目的と方法を切り分けることが重要だ」と小林先生から学んだ。それまでは、目的に対して、様々な方法や仕掛けを考える視点が欠けていた。特に、活動の説明については、教師による口頭の説明しか考えていなかった。授業で、目的と方法を切り離し、ある目的に対して様々な方法や仕掛けを考えた上で、学習者に最適な方法を用いることが重要だと学び、それを実践していきたいと感じた。学習者に最適な方法とは、その学習者の年齢や背景を考慮するということである。11 月 4 日の授業で小林先生が、「教室で人と人との感覚を 1 メートル空けたい場合、幼稚園児に対しては TT 体操を行うという方法があり、日本語教室では椅子の配置を変えるという方法がある」とおっしゃっていた。このように、同じ目的にも様々な方法があり、方法の中からどれを選ぶかは、学習者に合わせて決める必要があると学んだのである。

日本語教育観が大きく問い直されたことの 3 つ目は、学習者を信じることと丸投げすることは全く異なるということだ。筆者は、今まで学習者を信じることと丸投げすることを混同し、学習者を信じているつもりが、実際は丸投げしてしまっていた。そのことに気付いたのは、Lesson8 の復習の授業である。Lesson8 では、学習者がこれまでの授業で学んだことをリストに整理する活動を行なった。リストは 3 種類用意されており、筆者はグループの学習者に「これらのリストを自由に使ってよい。」と伝えた。学習者を信じて、学習者が自由にリストを使うことが、自分のペースで復習することに繋がると思っていた。しかし、「これらのリストを自由に使ってよい。」と伝えると、学習者は困惑し、リストを作り始めるまでに少し時間がかかった。その後の 12 月 2 日の授業では、「「学習者を信じる」と「学習者に丸投げする」はどう違うと思いますか。日研生としての経験を踏まえて具体的に考えてみてください。」（12 月 2 日講義スライド）という論点について、グループで話し合った。その際に、Lesson8 での出来事について話すと、グループのたまご先生から、最初に 3 種類のワークシートの特徴を説明するとよかったのではないかという意見をもらった。この話し合いから、筆者は学習者を信じていたのではなく、ワークシートの説明を怠り、学習者に丸投げしていたと気付いたのである。そして、1 月 20 日の授業で、Lesson14 の準備を行なった際に、小林先生が「自由＝やりやすさではない」とおっしゃっていた。Lesson8 で「これらのリストを自由に使ってよい。」と伝えると、学習者が困惑した理由は、自由が必ずしもやりやすいわけではなかったからだとわかった。この学びをきっかけに、学習者を信じることと丸投げすることは全く異なり、学習者に丸投げせずに信じる教師を目指したいと思った。

以上、本授業を通じて、特に自分の日本語教育観が問い直されたことを 3 つ述べた。自分の日本語教育観が整理されたことは他にもあるが、一方でまだ考えられていない点もあると思う。そして、すでに整理された教育観が今後変わる可能性もある。だからこそ、これからも自身の日本語教育観を問い直し続けたい。そのために、実践に対する振り返りをこれからも行いたいが、その際に意識したいことが 2 つある。1 つ目は、深い振り返りを行うことだ。11 月 18 日の授業で、小林先生が、「10 年の経験は誰でも詰めるが、深い振り返りをすれば、1 年の経験が 10 年の経験よりも勝ることがある。」とおっしゃっていた。10 年分の経験は 10 年後にしか得られないが、深い振り返りを行うことで、1 つの実践から多くの学びを得られる教師を目指したい。振り返りを行う際に意識したいことの 2 つ目は、事実と解釈を分けることだ。実践を振り返る際に、事実と解釈を分けることの重要性を本授業で学んだ。事実は一つだが、解釈は様々である。そのため、1 つの事実に対して、様々な解釈をすることで、振り返りを深みのあるものにしたい。

4.2　担当回である「SNS に写真をアップする」の授業を通じて、SNS に日本語で投稿したい学習者が、実際に日本語で投稿できるようになる。

次に、「私の目標」の 2 つ目である、「担当回である「SNS に写真をアップする」の授業を通じて、SNS に日本語で投稿したい学習者が、実際に日本語で投稿できるようになる。」について、どこまで達成できたかを述べる。この目標を設定した理由は、次のとおりである。

> 私自身、SNS で第二言語である英語を使おうとした際に、自分の英語が合っているか不安になり、投稿することを躊躇ってしまった経験があるため、日本語で投稿したいと考えている学習者が実際に投稿することの手助けになるような授業をしたいと思い、この目標を立てました。
>
> (Moodle「「私の目標」を書き込む掲示板です」)

この目標は、ほぼ達成できたと考えている。Lesson9 では、Padlet というオンライン掲示板アプリを SNS に見立てて、学習者が写真を日本語とともにアップするという活動を行なった。この活動において、Lesson9 に出席した全ての学習者が自分の写真を投稿できたため、目標がほぼ達成できたと考えたのである。Padlet に投稿された学習者の写真は、アイドルのコンサート、サッカー、カフェやペットなど様々であり、学習者それぞれの個性が溢れていると感じた。学習者が日本語で投稿を行えた理由として、次の 2 つが挙げられると考える。1 つ目は、できるだけ SNS に近い環境を整えたからである。本授業をデザインするにあたり、実際に SNS に投稿するという活動も考えたが、SNS を使いたくないという学習者もいると考えられることと、いきなり実際の SNS に投稿するのは心理的負担が大きいのではないかということから、Padlet を使用することにした。Padlet には、写真を文字とともに投稿でき、そこに「いいね」とコメントができるため、SNS、特に Instagram に近い環境が整えられた。そこに学習者は自分自身の写真を投稿するため、SNS を疑似体験できる。筆者がこの目標を立てた理由は、「私自身、SNS で第二言語である英語を使おうとした際に、自分の英語が合っているか不安になり、投稿することを躊躇ってしまった経験がある」(Moodle「「私の目標」を書き込む掲示板です」)からである。筆者のように、自分の日本語が合っているかどうか不安という学習者もいたと予想するが、Padlet が共有されるのは「わたにほ」の受講生と先生だけなので、安心した環境で投稿が行えたのではないだろうか。このように、実際の SNS に近い状況を作ることができたため、「担当回である「SNS に写真をアップする」の授業を通じて、SNS に日本語で投稿したい学習者が、実際に日本語で投稿できるようになる。」という目標をほぼ達成できたのではないかと考えた。「わたにほ」の学習者が、実際の SNS にて日本語で投稿できたら、本目標は完全に達成したと言えるだろう。「わたにほ」の学習者が、実際に SNS に日本語で投稿したいと思った際に、Lesson9 での学びが助けになればと思っている。

学習者が日本語で投稿を行えた理由の 2 つ目は、状況から出発した活動が行えたからだと考える。 Lesson9 では、学習者の状況は投稿した写真であり、その写真に合った日本語が必要だった。その状況、すなわち写真にあった日本語を自分自身で、もしくはたまご先生の支援を受けながら投稿することができたのが良かったと思う。Padlet の活動を行う前に、SNS で使用される日本語のインプットを行ったが、Padlet に写真を投稿する際は、インプットした日本語を使っても使わなくてもよかった。これこそが、「「文型」や「表現(機能)」から出発するのではなく,「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践」(10 月 7 日講義スライド)なのだと思う。2 章で述べたことと重なるが、ここでも、「わたしのにほんご」は学習者の中にあり、教師の役割はそれを引き出したり、日本語にすることを支援したりすることだと感じた。つまり、状況から出発した活動が行えたからこそ、「SNS に日本語で投稿したい学習者が、実際に日本語で投稿できるようになる。」という目標もほぼ達成できたのだと考える。

5. 終わりに

以上、本授業における 3 つの目標について、どこまで達成できたかを述べた。本レポートを書く中で、これからどのような日本語教師を目指したいかについても明確になった。また、本授業を通じて、自分の日本語教師としての未熟さを痛感した。だが、未熟だからこそ、この 1 学期間たくさん学び、考えたように、これからも学び、考え続けて、教師として成長していきたい。